

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部 3年 伊藤充哉

私は、昨年の春から、京都市内の中学校で JFC に対する学習支援ボランティア活動を行うと同時に、講義等で JFC 母子の抱える問題について学習してきた。今回のフィリピン研修に参加した目的は、日本において JFC やフィリピン人女性が抱えている問題について、CFO の方々や来日を予定するフィリピンの方々に伝えることと、フィリピンの現状を直に目にすることで、JFC や母親達のバックグラウンドを知り、問題への理解を深め、今後の学習支援ボランティア活動にも活かしていくことだった。フィリピンを実際に訪れたことで、日本での学習だけではわからないことをたくさん学ぶことができた。

フィリピンにいた時間すべてが新鮮で、衝撃で、学びであり、自分の中でなかなか簡単に整理できないているのだが、

CFO はもちろん、DAWN や Batis Center、マリガヤハウスのような NGO 団体は、あらゆる困難に直面している JFC 母子のために様々な活動を行っているが、お話を聞いていると、JFC 母子がいかに難しい立場に置かれているかということより深く感じさせられた。いかにグローバル化が進んでいるとはいえ、「国民国家」という枠組みは厳然と保たれており、その枠組みにおいて JFC 母子はいわばアウトサイダーとして扱われてしまう現状にある。フィリピンでは仕事がなく、悪徳ブローカーにつかまって日本に送られる。日本では劣悪な環境で働かされ、契約上逃げることも許されない。フィリピンに帰っても「ジャパユキ」と蔑視される。JFC も、日本にいてもフィリピンにいても差別を受けやすい。彼らの居場所が必要なのだと感じた。

また、ADB やカナダ大使館への訪問では、より広い視野からフィリピンと日本を見て、JFC 母子の問題を構造的な問題と結び付けて考えることができた。そもそもフィリピンから海外への移民が多いのは、フィリピン国内に仕事無く、賃金も低いという構造的な問題があるからだ。フィリピンの産業構造や格差拡大について知り、この問題にも対処しなければ、根本的に状況を変えることができないと感じた。カナダ大使館では、カナダの海外移民の受け入れ態勢を知り、日本も学ばねばならないと思った。

フィリピンの抱える社会問題については、道を歩いているだけでも感じた。整然と立ち並ぶ高層ビル群とそのそばに雑然と存在するバラック群。高級ブランドやレストラン、最新家電を目当てにデパートを訪れる人々と、人手が余って雑談にふけるスーパーの店員たち。その高層ビルやデパートの下で帽子や花を売り歩いて生計を立てる人々。何も言わずにこちらに手を差し出してくるストリートチルドレン。日本でも格差社会や貧困が大きな問題として取り上げられているが、それ以上に大きな問題がフィリピンのあちこちで常に目に飛び込んできた。

しかし、私たちから見れば貧困で生活に苦しんでいるのであろう人々が、そこまで不幸そうな表情を浮かべていなかったのも衝撃だった。苦しいからこそ笑顔でいるのか、本当にあまり苦しいと感じていないのかはわからないが、彼らは自分の暮らしを普通の当たり前のことだととらえ、それ以上をあまり求めようとしていないようにも見えた。フィリピンの構造的な問題は、明るい将来を描くことをも難しくしているのかもしれないと感じた。さらに、このいわゆる国民性のようなものの違いはどこから来るのか、詳しく言えば、人々が行動を起こす際の動機となりうるものは何であり、それは国家などの社会的要因で規定されているのかという疑問にもつながった。

また、フィリピン研修では、自分の英語力の無さや事前の学習不足から、悔しい思いや情けない思いをたくさんした。深い議論を英語ですることができたら、私にとっても、受け入れてくださった相手方にとっても、さらに実りある研修にできたと思う。フィリピンで自分の現在の能力を見つめなおすことができ、今後の勉学へのモチベーションにもなった。

フィリピン研修に参加したことで、日本で目にしていた問題は氷山の一角であり、様々な問題が複雑に絡み合っているのだとわかった。そして、その問題を様々なアプローチでとらえ、困っている人々のために奮闘しているたくさんの人々がいることを知った。私は将来、より多くの日本人によりよい暮らしを送ってもらえるようにする仕事をしたいと思っていた。しかし、フィリピンで生きている人も、日本とフィリピンのはざまに生きている人も、もっと言えばおそらく世界中のどこでも、困難の中で毎日を必死に生きている人がたくさんいるのだということに、この研修で改めて気づいた。当たり前のことではあるが、普段日本で生活しているとなかなか気づくことのできないものだと思う。フィリピン研修は、進路を考えるにあたって、世界中で困難に立ち向かっている人たちのために自分には何ができるだろうと改めて考えるきっかけになった。